春色連理梅巻之三

第五齣

江戸

梅暮里谷峩作

つまを恋ふる人を意そて山ならひとの。巻もる。欲きつるうぐひすの。谷より出て。梅の木に。移りて鳴ぬ。

ちる花を惜む

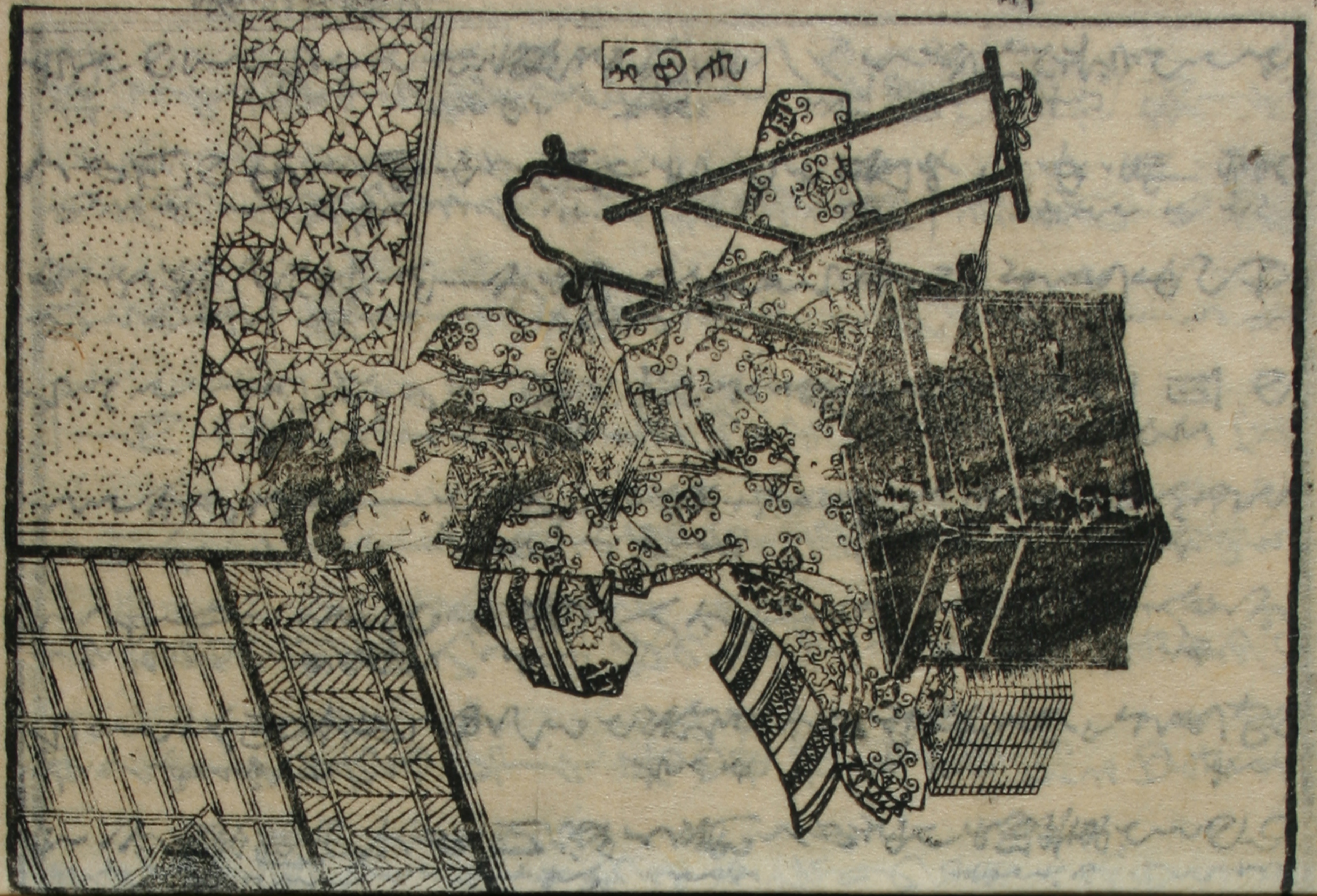
きりのあるもの
ふくろ
思ひ
あのぞ
お物の。
ままご
涙のまゝ
や
ちぎ
数りを
いま
ふくろ
ぬらし
ちゝ
ぬらし
ぬらし
ぬらし

おもひ
のこと
おや
一ど
あそび
うま
義し
よろ
こと
ある
ども
ども
ども

あるじやうさまたれ
さまたれ
イヤサ婚礼
えんれい
みそめ
ちんぢう
ふさがり
ふさがり
ふさがり

間者を探らせて居る
如き
お浪
でございますと
あちらの
どんな
風をして
あの家を
うろ
ついて
居ました
ので
ござ
いま
す

あそ
捉ごくそくあくまくろくあくまくろくあくまくろ





おまち

第六齣

うたゝめげる色もあり。商人(あきんど)などの男女(なんによ)の群集(ぐんじゅ)して、名(な)ある食店(くらひみせ)に入(い)りうち興(きょう)ずるもあり。又(また)は茶屋(ちゃや)の側(そば)に床几(しょうぎ)を設(まう)け、往来(おうらい)の人(ひと)を招(まね)き、酒肴(しゅこう)を売(うる)もあり。

万治頃(まんじごろ)の京(きょう)の図(ず)

「そもそも京(きょう)の町(まち)は、いかなる人(ひと)の作(つく)りそめしぞ。名(な)も高(たか)き平安城(へいあんじょう)の都(みやこ)なれば、さぞ広(ひろ)かるべしと、思(おも)ひの外(ほか)に狭(せま)くして、東西(とうざい)は一里(いちり)に足(た)らず、南北(なんぼく)は二里(にり)に満(み)たず。されども、東(ひがし)は粟田口(あわたぐち)より、西(にし)は嵯峨(さが)の奥(おく)まで、南(みなみ)は伏見(ふしみ)の里(さと)より、北(きた)は鞍馬(くらま)の麓(ふもと)まで、都(みやこ)の内(うち)と聞(きこ)えたり。

東山(ひがしやま)は、三十六峰(さんじゅうろっぽう)、静(しず)かに座(ざ)して、春(はる)は花(はな)の錦(にしき)を着(き)、夏(なつ)は緑(みどり)の衣(ころも)を重(かさ)ね、秋(あき)は紅葉(もみじ)の袂(たもと)を染(そ)め、冬(ふゆ)は白雪(しらゆき)の袖(そで)を連(つら)ぬ。

北山(きたやま)は、峨々(がが)として、峰(みね)聳(そび)え、谷(たに)深(ふか)く、木(き)暗(くら)く、水(みず)清(きよ)し。

西山(にしやま)は、嵐山(あらしやま)の花(はな)の盛(さかり)に、詠(なが)めやる、浅茅(あさぢ)が原(はら)の秋(あき)の風(かぜ)、小倉(おぐら)の里(さと)の時雨(しぐれ)の色(いろ)、嵯峨野(さがの)の露(つゆ)に、虫(むし)の音(ね)を聞(き)き、大井川(おいがわ)に、筏(いかだ)を下(くだ)す。

南(みなみ)は、鳥羽(とば)の作(つく)り道(みち)、秋(あき)の田面(たのも)の雁(かり)の声(こえ)、淀(よど)の川瀬(かわせ)の水車(みずぐるま)、いづれも、目(め)を驚(おどろ)かし、耳(みみ)を悦(よろこ)ばしむ。

北(きた)は、雲林院(うりんいん)の菩提講(ぼだいこう)、知恩院(ちおんいん)の安居(あんご)の法談(ほうだん)、いと尊(たっと)し。

中(なか)にも、六条(ろくじょう)の三筋町(みすじまち)、遊女(ゆうじょ)の美(び)を競(きそ)ひ、四条(しじょう)の河原(かわら)の夕涼(ゆうすず)み、上下(かみしも)の賑(にぎ)はひ、祇園(ぎおん)清水(きよみず)の花(はな)の幕(まく)、北野(きたの)の経堂(きょうどう)、内野(うちの)の一覧(いちらん)、歌舞伎(かぶき)の若衆(わかしゅ)、惣嫁(そうか)の女郎(じょろう)、あるは、四条(しじょう)の橋(はし)の上(うえ)、五条(ごじょう)の橋(はし)の下(した)、清水(きよみず)の坂(さか)、祇園(ぎおん)の町(まち)、よき人(ひと)、悪(あ)しき人(ひと)、上下(かみしも)、老若(ろうにゃく)、貴賤(きせん)、男女(なんにょ)、都(みやこ)の風俗(ふうぞく)、残(のこ)る所(ところ)なく見(み)えたり。

きんじん「やまもとくんとやらもよくくるが
元是もおもしろいやつだ
よろこばせるためにいろ〳〵あつかうが
金銭感心にきれいに彼的を上るまでだ
次をきりかへてやれ
けふ「ハヽヽヽヽ
小栗をだましてうまくやつたろ
ふ「きのふだまされたふりをしてやつたのだ
きんじん○「フン元まんまとやつたもよろこ
長のむすめとこんやくさせるとは

ものうへ。「フンうまくへ云アがら
なえ。
雑くへ。「ーくく朝晩もきだん
他勢。「ろくもねへ。○「それでも
うの。「まぐ〳〵送ひうりぬりかぶ
きだ。「ヲ居やうんでも鬼ぐ
捨嫌を丸つて居ヲアがるくてもふくろの
後くうと云て居ぜの引わく
ぬくやヲあるめくそこ。○「已ヲ
ぬくをまでて
ぬくやヲ結ぬ
ぬくろ
ぬくと

この新んざーどや
ア
まえてうくアー
まごえてよう
扶持拍工ゲ
らくへへへ
大体止扇
圓地焼
又「笑男
あようぜ○「フン遠
居るとは

ア扶持拍子ぞや□「そもじ
やつぱう
ア同形
ア「アそこ
このぐろ
ウン此ひょうたん
帝ョつ「ハ……
ふ
ア大鰐やう海
ア
おきくさん
おきくが
ア双で
ちえる
ア

いろもとこ
女房ともを引ぜ〻おく
ざ〻ちやう〇「ハ
そのおく
□「さうろうの横濱
町あたりの異人
英ね
男ぶ所の写
もとこ
男ぶ所の写
ハ〳〵〇「ハ
もとこ
どうも英
ウン小供
まき
□
ちよ
遊ねへ
きえ
ざ□
ヨ
ふ
ふ
ん
ね
つ
ま
き
ま
だ
う
ね
ん
ね
ん
ね
ん

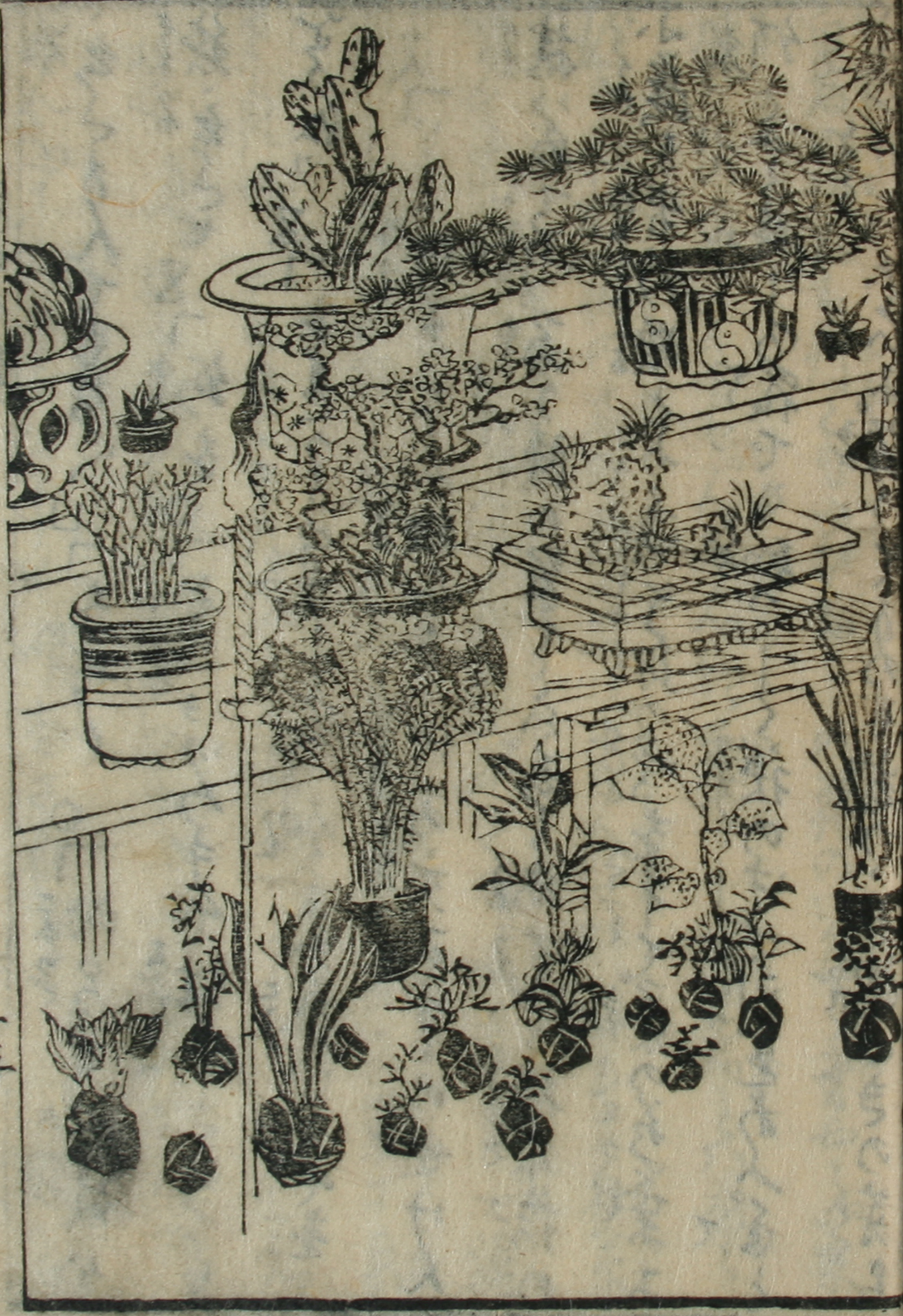
丹波嶋

名所



名所

丹波嶋



ろ
こうんでもれく
ゝろ
然こそ「何(なに)」をの
「ごゞ一ョ(ごゝ一ョ)」ろ
ま(ま)
「そまうぐうゝ。「ふ
ふ人「ふ
ま
揺ゝ「興(きょう)」まもろ
ろ(ろ)
「あぜく
「何(なに)」をの
「ごゞ一ョ(ごゞ

モウ

何ぼ抜せ
まるのくもつてあるものを
まるせうどやアのうろ
重ねて悪ひろうきく
「なせお客う
「十二お止よう
たく先刻の人
色ざるんぞ
「又ゐ
女房も改ある
おくとくれて
連でふうに二人
ひとり
人ちを
向尺ざう
む
ど
ま
け
歩行
き
歩いて他よ
一連ふ
ぐらうろ
外ぐわん
外ぐわん
ぐらうろ
ぐらうろ
ぐらうろ

ゑ
そもそも
悪(わる)ければ人(ひと)中(なか)で舩(ふね)をうつたるきのふの事(こと)をおもひ出(だ)して悪(わる)ければ
ふるまひをつゝしまるゝ方(かた)がおほくさんの舩(ふね)うきと
ぬしやアありませんか
こけもゝくぐきと云(いふ)ざまる又まち
ヲヤ
房
「イヽヱ
ヲヤ
房
「ヲヤ
房
「ヲヤ
房
「

あの人(ひと)そちら置(おき)て
こんばや
きく「ヲヤ
びく
八のことを
もも抱(だち)
する跡(あと)
あげくまもん
こあざ茅沢町(かやさわちやう)へ
曲(まが)る
湯(ゆ)
の喝(かつ)

「なさる房」
「こゝを
移ろ
「おきくさんひよんなおせをそ
「ア！　ものは
おりふし
「今
支婦
ふまるゝと
ちやくちやくと
ふひそ

表二香の夜のまひめぐり

おきく

むだつう
無駄ちう
まつて
待て
あげう
あげう
ぢやつ
ぢやつ
おきく
おきく
こんん
こんん
三人
三人
そこ
そこ
ここ
ここ
あく
あく
そこ
そこ
ちく
ちく
おきく
おきく
あこ
あこ
ふさり
ふさり
ここ
ここ
ふさり
ふさり
ちく
ちく

春色連理梅卷之三畢